

αMプロジェクト2025-2026 企画 プレスリリース

時下、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

このたび gallery αMでは、αMプロジェクト2025-2026「立ち止まり振り返る、そして前を向く」を開催いたします。

つきましては、以下の展覧会概要をご高覧いただけましたら幸いです。

αMプロジェクト2025-2026

立ち止まり振り返る、そして前を向く

Stop, Look Back, Face Forward.

ゲストキュレーター：大槻晃実（芦屋市立美術館）

2025年4月12日（土）-2027年2月20日（土）

参加作家：IDEAL COPY、河川龍夫、今井祝雄、植松奎二、百瀬文、高橋耕平、飯川雄大、中野祐介／パラモデル、柳瀬安里、林勇気

助成：公益財団法人 花王芸術・科学財団



デザイン：吉村麻紀

vol. 1 IDEAL COPY

2025年4月12日（土）-6月14日（土）]

vol. 2 河川龍夫、今井祝雄、植松奎二

2025年7月19日（土）-9月20日（土）

[夏期休廊：8月10日-25日]

vol. 3 百瀬文

2025年10月4日（土）-11月29日（土）

vol. 4 高橋耕平

2025年12月13日（土）-2026年2月21日（土）

[冬期休廊：12月21日-1月5日]

vol. 5 飯川雄大

2026年4月11日（土）-6月13日（土）

vol. 6 中野祐介／パラモデル

2026年6月27日（土）-9月5日（土）

[夏期休廊：8月9日-24日]

vol. 7 柳瀬安里

2026年9月19日（土）-11月21日（土）

vol. 8 林勇気

2026年12月5日（土）-2027年2月20日（土）

[冬期休廊：12月20日-1月11日]

主催：武蔵野美術大学 運営：武蔵野美術大学αMプロジェクト運営委員会

会場：gallery αM ギャラリーアルファエム

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

日・月・祝休 入場無料 12:30~19:00

<https://gallery-alpham.com>

※会期及び開廊日時の変更並びに入場制限等の対応を検討する場合がございます。最新情報は、Webサイト、SNS等をご確認ください。

■展覧会に関するお問い合わせ、取材依頼等は下記までお願いいたします■

gallery αM ギャラリーアルファエム

alpham@musabi.ac.jp

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階

tel:03-5829-9109 fax:03-5829-9166

立ち止まり振り返る、そして前を向く

大槻晃実(芦屋市立美術館)

この場所で私に何ができるのだろうか。最初に考えたのはそのことだった。私は公立美術館で学芸員として働いている。だが、指定管理者が運営する美術館であるため、公務員ではなく会社員だ。コレクションが健康な状態で受け継がれ、これから先も美術館が存続していくという未来は、決して当たり前のことではない。大切にしていけること、守らなければならないことには多様な視点や局面があり、それがちぐはぐに組み合わさった居心地の悪さが常に同居している。

そんな学芸員が、このαMという場所とどう向き合えばよいのだろうか。各地の美術館が様々な事情を抱え、困難に直面している。それは今もこれからも変わらないだろう。しかし、たとえどのような運営形態であっても、誰が運営者であっても、美術館にはかけがえのないものがある。それは、その美術館の歴史に寄り添いコレクションから刺激を受けながら展覧会を企画してきた歴代の学芸員や、地域や行政との間で試行錯誤しながら運営に関わってきた職員が経験を蓄積してきた場所であり、観客が作品と出会って思いを深めた展示室という場所だ。

30年以上にわたって時代の先端を敏感に察知して活動を続けてきたこのαMという場所では、作家がいて作品があり、鑑賞者が集い、対話や議論が重ねられる日々が続いてきたことだろう。そんな場所の過去と現在を往来しつつ、作品との対話の中から鑑賞者が自ら問いを立てて答えを探るような、そしてそれを皆で共有できるような場を作りたいと思う。参加してくれる作家たちと議論を重ねながら、歴史と今この時の美術を同じ次元でとらえることで、「美術のための場所」のことを皆で共に考えていく2年間にしたい。

自ら考えるという行為を続けることこそが、この社会で美術を健全に存在させていくためには不可欠であるはずだから。

ゲストキュレーター プロフィール

大槻晃実 Akimi Otsuki

芦屋市立美術館学芸員。専門は近現代美術。企画した主な展覧会に「今井祝雄—長い未来をひきつれて」（2024年）、「art resonance vol. 01 時代の解凍」（2023年）、「限らない世界／村上三郎」（2021年）、「植松奎二 みえないものへ、触れる方法—直観」（2021年）、「芦屋の時間 大コレクション展」（2020年）、「美術と音楽の9日間 rooms」（2020年）、「art trip vol.03 in number, new world / 四海の数」（2019年）、「小杉武久 音楽のピクニック」（2017年）などがある。

作家 プロフィール (会期順)

IDEAL COPY

1988年に京都のギャラリー射手座で開催した“Channel: Mode”を機に結成されたクリエイティブ・プロジェクト。発表ごとに不特定の複数メンバーで構成される。その活動は、彫刻や絵画といった既存のアートの形態ではなく、企画したプロジェクト自体を芸術として遂行するというプロジェクト・アートである。「アーティストは『作品』と『社会のシステム』のなかに存在する」という概念に基づき、IDEAL COPYのシステムを作り、様々な人が関わることで、その行為と結果を作品とする。メディアを通してワールドワイドな展開の可能性を追求している。近年の活動に「平成美術：うたかたと瓦礫（デブリ）1989-2019」京都市京セラ美術館（2021年）、「Channel: Copyleft」haku（京都、2021年）などがある。



《Channel: Exchange》
1993年- 撮影:浅野豪



《Channel: Copyleft》
2021年 撮影:浅野豪



《Channel: Merchandise 2021》
2021年

河口龍夫 Tatuso Kawaguchi

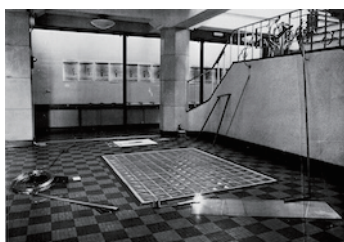
1940年兵庫県生まれ。1962年多摩美術大学絵画科卒業。1965年グループ〈位〉を結成。「第10回日本国際美術展（東京ビエンナーレ「人間と物質」）（1970年）や「第8回パリ青年ビエンナーレ」（1973年）、「第12回サンパウロ・ビエンナーレ」（1973年）、「大地の魔術師たち」展（1989年）に出品。国内各地の美術館でも個展の開催やグループ展の参加など発表が続き、2007年には名古屋市美術館と兵庫県立美術館で同時期に個展が開催された。「見えるもの」「見えないもの」の関係を問うとともに、鉄・銅・鉛といった金属、光や熱などのエネルギー、土、水、空気、化石や貝、植物、蜜蝋、書物などの物質を用いて、モノの本質に向き合い「関係」をテーマとしたコンセプチュアルな作品を制作している。

今井祝雄 Norio Imai

1946年大阪府生まれ。1964年、大阪市立工芸高等学校美術科在学中にヌーヌ画廊（大阪）で初個展「17歳の証言」展を開催、同年「第14回具体美術展」に出品。翌年、具体美術協会（具体）の会員となる。1966年に「第10回シエル美術賞」で一等賞を受賞、同年にグタイピナコテカで個展を開催。白一色で塗られた絵画や立体作品、モーターを利用した作品を「具体」で発表する一方、「第1回草月実験映画祭」（1967年）や「現代の空間 68—光と環境」（1968年）では映像や光による作品を発表するなど、「具体」の新時代を担うメンバーの一人として、「具体」が解散する1972年まで会員として活動した。「具体」解散以降は、写真や映像、音などのメディアを用いた作品を数多く制作している。

植松奎二 Keiji Uematsu

1947年兵庫県生まれ。1969年神戸大学教育学部美術科卒業。同年、ギャラリー16（京都）で初個展。1974年神戸市文化奨励賞受賞。翌年、当時の西ドイツに渡る。1976年ストックホルム近代美術館にて海外で初めての個展が開催された。1988年「第43回ヴェネツィア・ビエンナーレ」日本代表に選出。1990年「第12回神戸須磨離宮公園現代彫刻展」大賞受賞。石、木、布、鉄、ガラスなどを用いたインスタレーションのほか、彫刻、写真、映像、パフォーマンスなどにより、重力・張力・引力といった見えない力の法則から、世界の構造・存在・関係をよりあらわにしてきた。自身の身体を用いた空間の存在把握や、人と物体との関係性などを知覚させる作品を数多く発表している。



河口龍夫
《関係—電流》
1972-1975年



今井祝雄
《この偶然の共同行為を一つの事件として……》
1972年(今井祝雄×倉貫徹×村岡三郎)



植松奎二
《截接—Cutting》
1971 / 1975年

百瀬文 Aya Momose

1988年東京都生まれ。2013年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。映像やパフォーマンスを中心に、他者とのコミュニケーションの複層性や、個人の身体と国家の関係性を再考する。近年は映像に映る身体の問題を扱いながら、セクシュアリティやジェンダーへの問いを深めている。近年はアジア・カルチュラル・カウンシル (ACC) の助成を受け NY にて滞在制作を行うなど、国内外で活動を行う。主な個展に「百瀬文 口を寄せる」十和田市現代美術館 (2022年)、「I.C.A.N.S.E.E.Y.O.U」EFAG East Factory Art Gallery (東京、2020年)、主なグループ展に「国際芸術祭 あいち 2022」愛知芸術文化センター (2022年)、「フェミニズムズ / FEMINISMS」金沢 21 世紀美術館 (石川、2021年)、「六本木クロッシング 2016 展：僕の身体、あなたの声」森美術館 (東京、2016年) などがある。



《Jokanaan》
2019年 | 12分26秒 | 2チャンネル・ビデオ
愛知県美術館蔵 撮影: ToLoLo studio



《山羊を抱く / 貧しき文法》
2016年 | 13分50秒 | シングルチャンネル・ビデオ | 東京都現代美術館蔵



《Social Dance》
2019年 | 10分33秒 | シングルチャンネル・ビデオ | 大阪中之島美術館蔵

高橋耕平 Kohei Takahashi

1977年京都府生まれ。ドキュメンタリー映像やアーカイブ資料に自らの声や身体を介入させ、史実や他者との対話を巡る作品を制作する。主な展覧会・イベントに「art resonance vol. 01 時代の解凍」芦屋市立美術博物館 (兵庫、2023年)、「恵比寿映像祭 2023 soda (50秒)」東京都写真美術館 (2023年)、「コレクションとの対話: 6つの部屋」京都市京セラ美術館 (2021年)、「文化庁メディア芸術祭京都 Ghost」ロームシアター京都 (2018年)、「Gather—群れ」Gallery Nomart (大阪、2017年)、「切断してみる。—二人の耕平」豊田市美術館 (愛知、2017年)、「高橋耕平—街の仮縫い、個と歩み」兵庫県立美術館 (2016年)、「ほんとのうへのツクリゴト」岡崎市旧本多忠次邸 (愛知、2015年)、個展「史と詩と私と」京都芸術センター (2014年) などがある。



《この集合、この飛散、私ごとがこだまする。》
2023年 | パフォーマンス、インクジェットプリント、Type-Cプリント、木材、アルミ、油性インク、他
可変 撮影: 片山達貴



《目の交換、視線の先、彼岸と此処との間を》
2023年 | インクジェットプリント、水性塗料、鉄、アルミ、トタン、ゴム、プラスチック、テント生地、他 | 可変 撮影: 飯川雄大



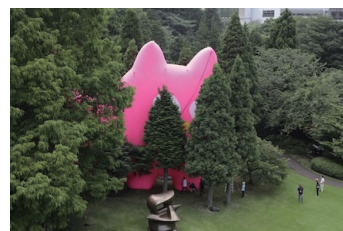
《畏敬のかたち、或いは喚起の振る舞い-2》
2021年 | HDビデオ (7時間8分49秒) リア透過スクリーン、鉄、アルミ、他 | 可変 | 京都市京セラ美術館蔵

飯川雄大 Takehiro Iikawa

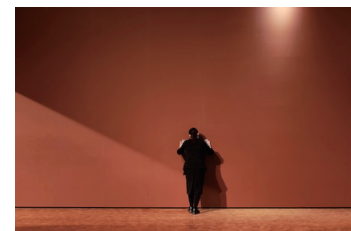
1981年兵庫県生まれ。2003年成安造形大学芸術学部情報デザイン学科ビデオクラス卒業。鑑賞者が能動的に関わることで変容していく空間や物が、別の場所で同時に起きる事象と繋がっているインスタレーション作品《0人もしくは1人以上の観客に向けて》、誰かの忘れ物かのような《ベリーヘビーバッグ》、全貌を捉えることのできない大きな猫の立体作品《ピンクの猫の小林さん》など、鑑賞者の行為によって起きる偶然をポジティブにとらえ、見るものに思考を誘発しながら展開していく作品など、〈デコレータークラブ〉シリーズを2007年より発表。主な個展に「未来のための定規と縄」霧島アートの森 (鹿児島、2023年)、「同時に起きる、もしくは遅れて気づく」彫刻の森美術館 (神奈川、2022年)、「メイクスペース、ユーズスペース」兵庫県立美術館 (2022年) などがある。2026年春に水戸芸術館現代美術ギャラリーで個展を予定。



個展「デコレータークラブ: ショップ」展示風景 (高松市美術館ランチギャラリー) 2024年
スポーツバッグ、キャリーカート、ネオン管、シングルチャンネル・ビデオ《Make Space, Use Space》(2022年) | サイズ可変 撮影: 飯川雄大



《デコレータークラブ ピンクの猫の小林さん》
展示風景 (彫刻の森美術館) 2022年
布、送風機 | サイズ可変 撮影: 飯川雄大



《デコレータークラブ 配置・調整・周遊》
展示風景 (国立国際美術館)
2022年 撮影: 飯川雄大

中野裕介／パラモデル Yusuke Nakano / PARAMODEL

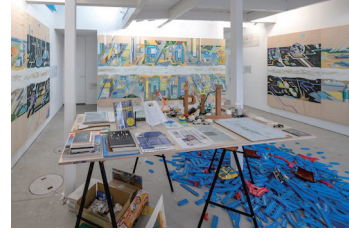
1976年東大阪生まれ。2002年京都市立芸術大学大学院絵画専攻（日本画）修了。2001年同大学の林泰彦と活動開始、2003年ユニット名を「パラモデル」に。メタフィジカルな「模型遊び」をテーマに、多様な作品を発表。2011-17年の図書館勤務を経た現在のソロ活動では、描画やテキスト・空間表現を軸に、文学・哲学・マンガ・建築・郷土文化・古典芸能など、古今の書物を横断し、題材とする創作を続ける。単著に『まちがえる読み、いかれた挿し絵』（青幻舎、2021年）など。近年の個展に「□とか△、できかけのPの話」京都高島屋 S.C.（2024年）、「よろぼう少年、かなたの道をゆく▷▷▷」《俊徳丸伝説》であそぶ 東大阪市民美術センター（2024年）、「かなたをよむ：海と空のあいだのP」不知火美術館・図書館（熊本、2022年）、「ま TiGer る読み、いか Re た挿し絵」高松市美術館（香川、2021年）などがある。



個展「よろぼう少年、かなたの道をゆく▷▷▷」
《俊徳丸伝説》であそぶ 展示風景（東大阪市民美術センター）2024年 撮影：高野友実



《Paramodelic-Graffiti》2022年
壁面・床面・地面にプラレール、酒、ボール、楽器、ミニカー、ゴミ、他 | サイズ可変
撮影：株式会社フジオ・プロダクション



個展「まちがえる読み、いかれた挿し絵」中野裕介／パラモデル 2010-2018 展示風景（MORI YU GALLERY）2018年 撮影：表恒匡

柳瀬安里 Anri Yanase

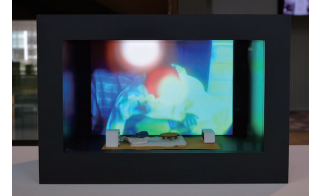
1993年埼玉県生まれ。2016年京都造形芸術大学美術工芸学科現代美術・写真コース卒業。身の回りの出来事を出発点とし、それに対するひとつの反応として作品を制作。制作は社会における自らの立ち位置を知るための方法であり、社会と関わるための方法と考える。主な個展に「ALLNIGHT HAPS 2017後期『接触の運用』#4」HAPS（京都、2018年）、「光のない。」KUNST ARZT（京都、2017年）、主なグループ展に「ホームビデオ・プロジェクト『テールズ・アウト』」大阪中之島美術館（2022年）、「『新しい成長』の提起 ポストコロナ社会を創造するアーツプロジェクト」東京藝術大学大学美術館（2021年）、「Red Line」旧五条楽園 平岩（京都、2021年）、「ニューミュージーション#3」京都芸術センター（2020年）、「Gallery selection: Video works」ギャラリー小柳（東京、2019年）、「現在地：未来の地図を描くために[1]」金沢21世紀美術館（石川、2019年）、「Oh! マツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ピーポー」兵庫県立美術館（2019年）、「なにをみて、なにをつくる」京都精華大学ギャラリーフロール（2017年）などがある。



《線を引く》
2015-2016年 | 映像インスタレーション（36分58秒） | サイズ可変



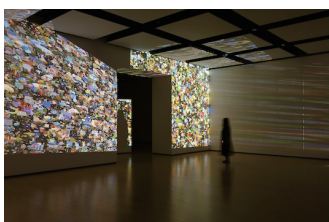
《光のない。—私の立っているところから》
2016-2017年 | 映像インスタレーション（17分37秒） | サイズ可変



《ホーム_01》2020-2021年 | シングルチャンネル・ビデオ、14インチ液晶モニター、木箱、ガラス板、ミニチュア家具
260×385×271mm 撮影：小牧寿里

林勇気 Yuki Hayashi

1976年京都府生まれ。膨大な量の写真をコンピューターに取り込み、切り抜き重ね合わせることでアニメーションを制作。自ら撮影した写真のほか、人々から提供された写真やインタビューを素材とした制作により、デジタル・メディアやインターネットを介して行われる現代的なコミュニケーションや記憶のあり方を問い直す。主な個展に「君はいつだって世界の入り口を探していた」クリエイティブセンター大阪（2022年）、「電源を切ると何もみえなくなる事」京都芸術センター（2016年）、「あること being/something」兵庫県立美術館（2011年）、主なグループ展に「ホームビデオ・プロジェクト『テールズ・アウト』」大阪中之島美術館（2022年）、「オーバーハウゼン国際短編映画祭」（ドイツ、2021年）、「彼方へ」静岡市美術館（2017年）、「未来への狼火」太田市美術館・図書館（群馬、2017年）、「窓の外、恋の旅。—風景と表現」芦屋市立美術博物館（兵庫、2014年）などがある。



《another world -alternative》2017年
ビデオインスタレーション（8分） | サイズ可変
兵庫県立美術館蔵
音楽：FourColor、撮影：木奥恵三



《細胞とガラス》2020年
（京都大学iPS細胞研究所 CiRAとの共作）
シングルチャンネル・ビデオ（9分） | サイズ可変



《Unseen》2025年
3チャンネルビデオインスタレーション
サイズ可変